

モーリス・ドニ作〈フランス美術の歴史〉:描かれた「美術史」再考

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士後期課程

野中顕子

モーリス・ドニは 1918 年、プティ・パレ丸天井部分の壁画装飾をパリ市より委嘱され、市当局から与えられた「勝利」という主題に基づき〈フランス美術の歴史〉を制作、1925年にその完成を見た。同壁画は、中世から後期印象派までのフランス美術の歴史を、芸術家の肖像や作品の引用と各時代の代表的建築物の描写等を組み合わせ、時代の流れに沿って場面構成することにより表象している。フランスにおいて近代美術の歴史化が頻繁に企てられた1920年代に制作されたこと、またモーリス・ドニその人が多くの著述を通じて近代美術史に介入する意図を抱き続けたことを考慮すれば、この壁画は画家による美術史観提示のきわめて興味深い作例といえよう。しかしながら、本作品に関する先行研究はほとんど存在しない。そもそもジャン=ポール・ブイヨンやドニ作品の収蔵美術館による若干の研究を除けば、ドニの20世紀以降の制作活動に関する研究は十分とはいえず、また近年のいわゆる美術史の歴史や方法論への関心の高まりをまっしてはじめてこの作品の解釈に新たな可能性が開かれたともいえる。

本発表では、まず文献資料から壁画制作の経緯を明らかにし、また習作群および完成作品を検討することにより構想の変遷とその意図を解明する。さらに表象された芸術家や作品モチーフの取捨選択とそれらによる画面構成の分析、およびドニの著述や同時代に成立したフランス美術史の著作との比較によって、同作品が既存の美術史の著述の単なる図像化ではなく、中世美術・宗教美術の強調といった偏差をはらみ、セザンヌとゴーギャンを象徴主義の父に据え、さらに古典回帰を唱えたドニの近代美術の系譜学の具現化に他ならず、歴史記述であると同時に自己の芸術的起源の物語記述にもなっていることを指摘する。他方、ポール・ドラローシュなどの作例と比較することによって、芸術家個人よりも作品に焦点をあてるドニの表象形式の特異性を示し、それが列伝を脱した「美術史」の成立や、美術館・メディアといった美術を取り巻く制度の変動を受けたものであることを考察する。

以上から本作品は、作品と言説とにより織り成されるドニの芸術活動の全体において、〈セザンヌ礼賛〉等とならぶ重要な信条表明である同時に、近代の芸術家にとって不可避なものとなった自らの歴史的 positioning や系譜、起源の自分自身による構築を、時代の要請に即して端的な形で提示したものと結論づけることができるだろう。